

# ホメオパシー推薦図書館

9月1日全国書店発売

『医師の迷宮』に続くパラケルスス第二弾！

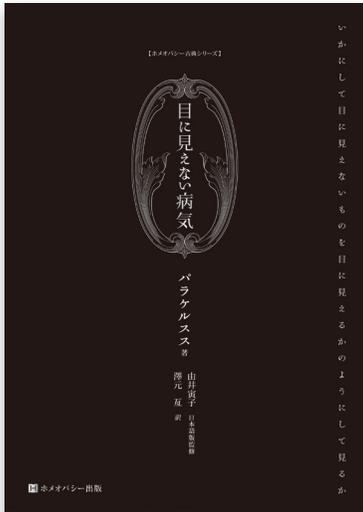
精神疾患の原因とその治療法について書かれた古典的名著！

〈ホメオパシー古典シリーズ〉

## 『目に見えない病気』

いかにして目に見えないものを  
目に見えるかのようにして見るか

パラケルスス著  
由井寅子 日本語版監修  
澤元 互訳



3,990円(税込) 248ページ  
ホメオパシー出版刊

パラケルスス著『目に見えない病気』を読んでみた。

ご存知のように、パラケルススはルネサンス初期の医学者であり、錬金術師である。彼の思想は後世において多方面の影響を与え、とりわけ今日の代替医療の思想的な土台を築いたとされている。ハーネマンもパラケルススの影響を受けていたことは明白で、性格的にも自信家で、歯に衣を着せぬ痛烈な批判をするところや、そのために伝統的なアカデミズムから追放されたことなど、共通するところが多い。

ており(ただし第二巻は欠落)、第一巻は「信仰によって人間に起こる病気について」と題され、信仰(ないしは「信念」)のあり方が、人の



フィリップス・アウレオルス・パラケルスス (1493-1541) スイス人医師・錬金術師

健康を大きく左右すると主張している。そして舞踏病などの具体的な事例をあげて説明が展開されており、最後の結びの言葉として、信仰も医薬と同じように考えるべきだと語っている。

「医薬は健康に役立つ一方で、死を引き起こすためにも使える。だから、この点について次のように心得てほしい。すなわち、君たちは、信仰をその働きにおいても同じように理解すべきである」(七十六頁)

第三巻は「目に見えないものの働きについて」と題されている。パラケルススによれば、想像力による信仰心(信念)の働きは「目に見えないからだ」によるものであり、想像によって病気が引き起こされるとする。さらにまたこの巻では、今日でいう「胎教」と思われる記述があり、次のように語られている。

「女性が妊娠中に窃盗や色情の欲望を思い浮かべたとしよう。こういう欲望は子どもにも働きかけ、

生まれながらにして持っている素質となり、生涯にわたって付きまとう」(二〇〇頁)

パラケルススのこうした見解は、現代の医療に照らし合わせてすべてが支持されるものとは言えないにしても、想像力が胎児に影響を与えるという考え方そのものは、今日においても慎重に耳を傾ける価値があることは確かであろう。本書に目を通していくと、ときどきこのようなハッとさせられる言葉が飛び込んでくる。

第四巻は「目に見えないものについて」と題され、聖人の遺体(聖遺体)が持つ力などを素材にあげながら、磁気的ともいふべき治癒の力について論じられている。そして、

へたに不自然な治療を行うよりも、生命が持つ自然治癒力を信頼する方がよいと主張している。

「(薬よりも) 自然の力に頼った方が、人々は、はるかによりいっそう健康を回復する。人々は目に見えない仕方健康になる」(一五六頁)

また、この巻には、ホメオパシーを彷彿とさせるような記述も見られる。

「真の薬は目に見えるものではない。……薬の物的な側面は必要でない」(二五六頁)

「物質が量的に少なくなれば少なくとも、それだけいっそう医薬の効力は高まる」(一五七頁)  
言うまでもなく、以上の記述は希釈震盪によって作られたレメディーや、「最小投与の法則」などを思い

起こさせるものである。

最後の第五巻は「目に見えない働きについて」と題され、天使や悪魔、魔術などに言及しながら、

信仰の正しいあり方を説いている。また、ここでもホメオパシーの考え方と共通する見解が散見される。たとえば聖書の言葉を用いてこう述べている箇所がある。

「敵が」私たちを槍で刺し殺せると思っていると、その槍は折れてしまふ。まさにその同じ槍が私たちの医薬に変わるからである」(二六五頁)

これは毒物(その他)を原物質とするレメディーによって病を癒そうとするホメオパシーの原理そのものである。  
一方、実証主義を貫いたハーネマンの姿勢に通じる

ような言葉も見られる。

「読者よ、事柄を正しく認識したいのであれば、独善的に自分の信念だけが正しいと思つてはならない。判断するならば、経験に基づいて行うべきである」(二六四頁)

このように、本書を読み進めていくと、ハーネマンがパラケルススの影響を受けていることが浮き彫りにされてくるのであるが、もしかしたらハーネマンは、パラケルススの生まれ変わりではないかとさえ思われてきたりもする。

数世紀を経て現代にみえた本書は、決してスラスラと読めるような文体ではないが、ときにはじつくりと腰をすえてこのような古典に目を通し、時空を超えて過去

の偉人と対話してみること、必要な経験ではないだろうか。

書評・齊藤啓一

齊藤啓一

一九六〇年東京生まれ。作家、哲学者。意識の覚醒をメインテーマに、哲学や心理学の研究に励む。ホスピスの心理カウンセラーを務めた経験を持ち、心理療法や統合医療の分野にも造詣が深い。カレッジ・オブ・ホリスティック・ホメオパシー講師(心理学担当)。著書に『愛は治癒力を活性化する』(ホメオパシー出版)など、十数冊の哲学関連の著作がある。

